

# 英語言語のグローバル化

講師：アンドリュー・ウォルパート 通訳：小貫大輔

〔第30回文明研究所講演会〕  
2014年1月23日

みなさんこんにちは、私の仲間たち…。東海大学に呼んでいただいて、ほんとうにうれしいです。今日ここで、一人のイギリス人として、他の国の方に英語のグローバル化などというタイトルでお話をすることになって、実は申しわけないというか、そういうふうに思っています。ただ、ここでみなさんと一緒に国籍・言語・文化などを超えた「人類共通」のテーマについて考えることができたらうれしいと思います。「英語のグローバル化」という言葉は、ある意味べつに説明する必要もないようなテーマです。昔イギリスという国は、世界の中で巨大な力を持った、パワフルな国でした。政治的な意味でも、貿易また軍事的な意味でも、さまざまな意味で世界を牛耳っていた。しかし、それはもう昔のことです。今は、北アメリカの人たちがそういう役割を担っており、政治的・軍事的・経済的な意味で世界を席卷し、そのこととともに英語という言語が世界に広がっています。それは外側から見るかぎりにおいて、ある意味非常に簡単なことです。なぜ英語という言語が今日の世界でこんなに重要な役割を担うことになったのか、これだけ勢力が広がったのか、ということは、そういう歴史を知っていれば説明するまでもないことです。ただ、それは外側から見たかぎりにおいてのことです。みなさんは学生です。そして我々学問をする者がいつも心がけておかねばならないのは、簡単な答というのは「正しい答」かもしれないけれども、その答が必ずしも「答のすべて」ではないということです。

今日は、イギリス・アメリカという国家の勢力が英語を世界的な言語に押し上げたということの他に、英語という言語そのものの中に何か世界の言語となるための理由・要素があったのか、そのことについてのお話をしたいと思って準備してきました。

## 《言語の変化・変容の二つの流れ：文法の「本質化」と語彙の増大》

みなさんをご存じのことと思いますが、言語というものはどれも常に変化・変容しています。みなさんのおじいちゃん・

おばあちゃんたちが「きみたちの喋り方は…」と文句を言ったりしませんか？ どんな言語にも起こることです。どんな言語も、ある意味では悪くなったり、ある意味では進歩したり、そういうことが常に起こっています。言語の変化・変容には、二つの大きな流れがあります。一つには、文法構造が常に単純になろうとしているということです。言語学あるいは言語の歴史の学問では、それを「文法の単純化」と言います。しかし、私は「単純化」という言葉はまちがっていると思います。正確ではない。つまり、言語の中に「繰り返されるムダなこと」、「必要がなく、やらなくてもいいようなこと」が含まれている場合、それが意識されるとされないにかかわらず、しだいに抜け落ちていく。しだいに捨て去られていくということが起こるのです。そういう意味で私は「単純化 (simplification)」ではなくて、「本質化 (essentialization)」つまり本質的なものだけが残る過程、と表現したほうがいいと思っています。どうでしょう？ みなさんは日本人として現代の日本語の喋り方が変わっていく、繰り返されるムダなことが、そんなことはもうやらなくてもいいんじゃない？ というふうに抜け落ちていく傾向を感じますか？

言語の大きな変化の二つの流れと言ったもう一つは、しだいに語彙が増えていく、言葉が豊かになっていくということです。テクノロジーや科学が常に進歩している中、常に新しい言葉が必要とされています。また、どんな言語にも他の言語からの影響が浸透してきています。または、言葉の持っていた古い意味が新しい意味に変わっていく。そのことで、また語彙が増えていく。どんな言語もそういう変化を経験します。もう一度言います。文法においては本質化が進み、もう一つは、辞書がどんどん分厚くなっていくという傾向があるということです。今日お話ししたいのは、英語言語においてある特定の時期にこの二つの流れがとて強い力で進んだということです。グレート・ブリテンという島の中で、ある文化的・政治的そして言語学的な理由があって、ある時期にこの二つの変化がたいへんなスピードで進行したということです。(通訳に対して) 私は「acceleration」と言ったのに、君はなぜ

「speed」という言葉を使うんだい？ 君の通訳にはいろいろと英語の言葉が出てくるんだね…

ところで、ユーラシアという、ヨーロッパとアジアとがつながる一つの大きな大陸のことを考えたとき、それはたった一つのつながりですね。ユーラシアという巨大な陸地があって、その陸地の——東とか西とかいう言葉はきらいなんですけど——こっちのはずれに行くといくつかの島がポツポツとあって、あっちのはずれの方に行くともたいくつかの島がポツポツとある。まったく両極端のところにあるこの二つの島々の国——というのはもちろんイギリスと日本の話ですが、非常に違うと同時に、またびっくりするぐらい似ているところがあるのが、いつもおもしろいなと思っています。では、イギリスの歴史について、大まかですが重要な点をかいつまんでお話ししたいと思います。イギリスの島々で起こったことが、この島で——みなさんのいる島々で起こった歴史と何か似ているところはないかと思いながら話を聞いてください。

#### 《ケルト文化の時代、ローマ帝国の支配、ヴァイキングの侵入、そしてノルマン征服》

ブリテン島というところで最初に起きた文化・文明は、ケルト人たちのものでした。ケルト文化というのは、おそらくもともとは中央から東ヨーロッパの辺りで始まった文化でした。それ以前にはさらにまたどこか別のところであって、そこから移動してきたはずです。ケルト人たちは、南はスペインから、そしてもちろん今日のイギリスの島々も含めて、非常に広い範囲のヨーロッパに広がっていました。ケルト人にとって、自然は神様で溢れる世界でした。一人の神様だけでなく、いろんな神様がいる——山にもいれば、雲にも、木にも、川にもすべてまわりの自然の中に神様がいるという考えを持っていました。

みなさん、ストーンヘンジって聞いたことがありますか？ 巨大な石を使った、世界で最も有名な遺跡のひとつですね。ストーンサークルとも呼ばれるものです。そういったケルト人の記憶につながるものは、今でも、ウェールズ地方とかスコットランド、コーンウォール地方、そしてもちろんアイルランドにもたくさん残っています。ケルト人の住むそういう土地に、あるときローマ人がやってきました。ローマ人は、もちろんローマで始まって、後にヨーロッパ全土に広がり、ある意味でケルト人が征服していた地域すべてを征服することになりま

した。ローマ人もまたいくつもの神を持っていました。しかしケルトとは少し違って、神様が人間化されていました。ローマ人はグレート・ブリテン島も征服しますが、実はアイルランドは一度も征服していません。少し話しがそれますが、おもしろいことに今日のイギリスではグレート・ブリテン島はプロテスタントの勢力圏であるのに対して、アイルランドというローマン・カトリックの勢力圏は実は一度もローマ人自身に征服されていないんですね。

西暦410年にローマ帝国が事実上崩壊すると、あちこちに派遣されていたローマの兵士たちは本国へと撤退していきました。ブリテン島からもローマの兵士たちが去っていった。政治的な構造物が突然何もかもなくなってしまいました。そのころのケルト人はケルト語を喋っていたし、ローマ人はさまざまな種類のラテン語を話していました。英語という言語の歴史は、ローマ人が撤退したのちに始まるのです。ローマ人がいなくなって守りがなくなると、北ヨーロッパの地域からさまざまな民族がブリテン島を征服・略奪にやってくるようになります。北部ドイツの方からはアングル族、サクソン族が、デンマークからはジュート族が来ます。そしてデーン人がたいへんな人数でやってきます。その人たちが喋っていた言語は各々全部違うのですが、北ゲルマン語族と呼ばれる言語族の中の少しずつ異なる言語でした。ごくごく簡単に言ってしまうと、ブリテン島は様々なゲルマン語、古い古いドイツ語を喋る人たちで一杯になったのです。もしここに言語学に詳しい人がいたら、このあまりに単純化された表現では申しわけないのですが、ビジュアル的にはそう言い表したほうが私の言いたいことがよりよく伝わると思います。

7～9世紀にヴァイキングの時代にあったデーン人たちが、今のイングランドの土地にやってきました。ヴァイキングという北欧の人たちが、もともとはケルト人が征服していた地域、次にローマ人が征服していた地域を、もの凄い勢いで侵犯しはじめました。——「ヴァイキング」という言葉を使うと、日本人たちは「何でも好きなものをもって食べていって、あのことでしょ」と言う人がたくさんいますが（笑）、どうしてなんだろうなあ、どこからヴァイキングなんて名前がついたんだろうなあ、いつも不思議に思っています（笑）。そのヴァイキングと言われる人々はエネルギー一杯で、世界中にももの凄い勢力で広がっていきました。あまりに凄い勢いで広がっていったので、行った先々で自分たちが何者だったの

かわからなくなってしまいました。そして行った先々に根を張って定住していきました。たとえばフランスの北部を侵略したとき、彼らはたったの2世代でスカンジナビアの言葉を忘れてしまって、フランス語を喋るようになりました。北欧のヴァイキングの人たちはそうして北フランスに住みついて、にんにくを好んで食べるようになり、オリーブオイルも好きになって、かつては知らなかった地中海地方の食習慣に染まっていたのです。11世紀にブリテン島は大陸からの征服を受けますが、征服者はフランスのノルマンディーからやってきたノルマン人と呼ばれる人たちでした。しかしノルマン人とはフランス人ではなくて、ノールマン (Nor - Man) という名前にはっきりと表れる通り、北から移住したスカンジナビアの人たちの子孫でした。彼らが、フランス的で地中海的な文化・言語をイギリスにもたらしたというわけです。

最初はケルト人、そして次にローマ人がブリテン島に暮らしていました。とても興味深いことに、ローマ人は400年もの間ブリテン島を征服していたにもかかわらず、引き上げていった後にはローマ的な言語要素をブリテン島に何も残しませんでした。残されたのはローマ的な地名だけでした。英語の中にはラテン系の語彙がたくさん入っていますが、それらは当時のローマの言葉が残ったものではなく、ずっと後になって再度イギリスにもたらされたものなのです。ローマ人の後、5～8世紀の間にアングル族、サクソン族、ジュート族、デーン人という人たちがやって来て、北ゲルマン語族のいろいろな言葉・方言をたくさんイギリスにもたらしました。何が言いたいかというと、ブリテン島というのは様々な北ヨーロッパ＝北ゲルマン族の様々な言語が流れ込み混淆していった地域であり、それが英語という言語となったというわけです。そして、1066年にノルマン族がやってきて、フランス語がもたらされます。

### 《ゲルマン諸語とフランス語の二層化社会で進んだ言語の「本質化」》

ノルマン族によって、それまでいろんな人が住んでいたブリテン島に、初めて政治的な一つの構造、つまり中央政府というものが生まれることになります。そしてその後しばらくの間、ブリテン島には二つのレベルの言語階層が継続して存在することになります。それはどういうことかということ、もともとブリテンに住んでいた、様々なゲルマン語を喋る人たちが下

層階層として存在し、他方、征服者であるノルマン人たちがフランス語を話してその上層の階層としてそこにいたわけです。道端で、あるいは市場や村々、そして畑などでは、人々はいろいろなゲルマン語の混淆したものを喋っていて、けれども政治の場においては、統治者たち＝為政者たちはフランス語を話していた。そういう分裂した状況がしばらく続きます。そこで、本当の意味での今日の英語が生まれるための重要な一歩が踏み出されます。その時期は王様も教会も、そしてそういった支配者階級の人たちはゲルマン語を学ぶ気などさらさらなくて、フランス語を話して暮らしていました。そんなときに何が起こったと思いますか？

では聞きますが、言語というものをコントロールし、変革を押しさえつけようとする人たちはどんな人たちでしょう？ 言語的に保守的な勢力というのはどこにあるんでしょう？——今日では、伝統的な言語を守る役割は大学が担っていますね。あるいは、言語が変化していくことに抵抗する人たちというのは、年齢の高い人たちですね。ブリテン島の為政者たち、つまり保守的な傾向を持つような人たちはフランス語を話していたと言いました。その人たちは、ゲルマン語を喋っている人たちの世界のことには何ら関心を持ちませんでした。そんな時代だったために、ブリテン島ではゲルマン諸語が変化していくことを止める勢力はどこにも存在しなかったわけです。それで、その時期にゲルマン語を喋る人たちの間で様々なゲルマン語があつというまに融合し、新しいゲルマン語ができていくというプロセスが起きたのでした。

例を挙げましょう、そうじゃないと抽象的でわかりづらいうしょうから。私は日本語はよく知りませんが、ドイツ語でもスペイン語でもインフレクションというものがあります。たとえば英語でいえば「I go.」、「He goes.」と語尾が変わりますね。スペイン語はもっと変化します。それを「インフレクション（語形変化）」といいます。ブリテン島の様々なゲルマン語は、とてもとても複雑に語形変化するものでした。動詞の活用変化が激しく、名詞も主格であるか目的格であるかなどによってたくさんの変形がありました。当時の古い英語では、こんにちのドイツ語と同じように、名詞はすべて男性形・女性形・中性形と三つに分かれた形をとりました。形容詞も、現在のドイツ語と同様に名詞の変化に併せてそれぞれ変化し、あるいは単数であるか複数であるかに応じて変化する、とてもとてもややこしい言葉でした。ちなみに今日のロシア語はド

イツ語よりもさらに複雑です。

私がみなさんに想像していただきたいことは、さきほど申し上げたように、文化・言語を保守的に守ろうという勢力はフランス語を話す上層階級の人たちで、一般の人たちが喋っている言語に対してまったく関心がなかった。他方、一般の人たちが喋っている様々なゲルマン語では、複雑だったインフレクションが無意識のうちに不要なものだと感じられるようになっていった。そういう背景があって、そういった語形変化がいつの間にか棄て去られて、使われなくなっていき、しかも誰もそのことを問題にしなかった。「古き良き言葉」などというものを守ろうという保守勢力がなかったわけです。英語という言語の歴史の中で、この時期は、さきほど私が申し上げた「本質化」=エッセンスだけが残るプロセスの最も際立った時期でした。

今日でも英語には「三人称単数現在」というのがありますね。「I go, you go, he goes, we go, you go, they go」というふうに、だけど過去形になると、「went, went, went, went, went, went」とみんな一緒になってしまいます。代名詞には「I, my, me, mine」というインフレクションがまだ残っていますが、もう一つたいへん重要なことに、すべてのヨーロッパ言語では維持されているけれど英語では捨て去られたものがあります。何かというと、フォーマルな「あなた」とインフォーマルな「あなた」、つまりていねいに使う「あなた」という表現と、友達として親しく使う「あなた」という表現です。フォーマルとインフォーマルの使い分けというのは、英語以外のヨーロッパのすべての言語では今でも使い続けられています。ドイツ語では「Sie」と「du」、イタリア語では「Lei」と「tu」、スペイン語では「usted」と「tu」、フランス語では「vous」と「tu」などです。英語はその使い分けを棄ててしまいました。英語では、女王に話そうが自分の兄弟に話そうが、「you」のみです。フォーマルな方の「you」が残ってインフォーマルな方の「thou」がなくなったのもおもしろいことだと思います。また、他のヨーロッパ言語では、名詞は女性形、男性形、あるいは中性形に分かれます。英語はそれも棄て去りました。

### 《フランスとの百年戦争をへて英語化するイギリス社会》

かつて、古英語 (Old English) と呼ばれる英語が喋られていた頃には、たくさんのインフレクションがありました。そのあとノルマン征服を経て、凄い勢いで英語が変化しました。

その次の、中英語 (Middle English) 期の 1337 年から 1453 年に、イギリスは百年戦争と呼ばれる戦争の時代がやってきます。イギリスとフランスとの間で戦われた戦争です。実際は 100 年以上続いた戦争です。それまでは、イギリス国王がフランスの中にも広い領土を持っていました。しかし、フランスの側である種の独立運動のようなものが起きたのです。その時期の有名な人に、フランス側で戦ったジャンヌ・ダルクという少女がいます。最終的にフランスはイギリスを破り、フランスの地から追い出してしまいました。100 年にもわたった戦いの結果、ブリテン島ではフランス語は敵の言葉だという感情が生まれ、国民の間でフランス語を嫌う心理が根づくことになりました。

この時期には他にも不思議なことが起きています。ペストの大流行です。ブリテン島だけでなく、ヨーロッパ全土でたくさんの方が死にました。そこにある種の歴史の皮肉が生まれます。この病気では、貧しい人、衛生的な観念が低かった人たちが最もたくさん死ぬこととなり、その結果、農民階級の人口、つまりフランス語でなく英語を話す人たちの人口が急激に減ってしまいました。皮肉というのは、まわりの農民が大量に死んでしまったがために、生き残った農民たちは一人一人の経済的な重要性が増すことになったからです。生き残った農民たちはこう言ったのです。「これからは、より多くの賃金を払ってくれる人のために働きます」と。労働運動の歴史を振り返ると、イギリスでは実はこの時期までさかのぼることができるわけです。まとめると、百年戦争のためにブリテン島ではフランス語は敵国語だと考えられるようになり、イギリスでは英語を喋ろうということになった。その同じ時期、ペストの大流行もあって、それまでフランス語ではなく英語を喋っていた下層階級の農民たちが、政治的にも経済的にも力をつけることになったというわけです。イギリスの歴史上、初めて議会在英語で開催されたのは 1362 年のことでした。

この大変化の時期の後、1467 年には初めての印刷機がつけられました。それによって、それまで続いていた英語言語の変化は突然ゆるやかになります。それ以前は、文字で書かれたものなんて裕福な者しか持っていませんでした。ところが、印刷機の登場でもっと多くの人が書かれたものを手にすることができるようになりました。印刷機をつくったのはウィリアム・カクストン (William Caxton) という人ですが、彼はとても頭のいい人で、印刷する前にあることを決めました。

当時あちこちにあった方言——北の英語、南の英語と、少しずつ言葉が異なるので、どの英語の単語を使用するかを決めたのです。それ以降の英語の標準は、彼が選んだ言葉によって決まることになったのです。さきほども言いましたように、古英語にはインフレクション＝語形変化がたくさんあります。中英語は、フランス語と離れていく時期の、さまざまに葛藤をもった英語でした。現代英語というものは、1500年代に始まったと私たちは考えています。ルネッサンスの時期ですね。そしてこの現代英語の大きな特徴は、語形変化が極端に少ないということ。ヨーロッパの他の国と違って、基本的に大部分の言葉に変化がないということでした。

英語言語の歴史を振り返ってきましたが、このように文法上の「本質化 (essentialization)」というプロセスが起きているその同じ時期に、たくさんの、たくさんの言葉がいろいろなところから入ってきて、語彙が豊かになっていきます。フランス語を喋っていた階層の人たちがフランス語を喋るのをやめて英語を喋るようになっていったとき、彼らは何千というフランス語起源の言葉を英語にもたらします。そして教会も、たくさんのラテンの言葉を英語言語にもたらします。また、ルネッサンス期に古典を学び、科学が発展する中で、ギリシャ語起源の言葉もたくさんもたらされます。アメリカ大陸が再発見されたときには、ネイティブ・アメリカンの言葉もたくさんもたらされました（「アメリカ大陸の発見」ではなく「再発見」と呼んでください）。

### 《動き＝身体 (Body), グループ意識＝魂 (Soul), そして個＝Spirit の時代へ》

さて、ここからはちょっと異なった観点から見てみましょう。古英語以前の時期から古英語の時期にかけての特徴的なことは、人々が移動・移住していたということです。人の移住がとても活発だった時期です。難民ということではありません。経済的なチャンスを狙って、ということでもありません。この時期というのは、ヨーロッパの人たちがみな挙って移動した時期なのです。その当時は誰もが移動していて、「そんなに牛とか家畜とかたくさん連れて、家族を連れて、どうしておまえは移動しているんだ？」などと聞こうものなら、「何言ってるんだ、移動しなきゃいけないじゃないか！」とでも返ってきそうな、なにか凄い衝動に突き動かされて人々が移動していた時期なのです。意識してよりよいものを求めて移住したわけ

でも、移動したいと考えて移動したわけですらありません。足の中に、身体の中に、意志の力の中に、移動しなければならないという衝動があった時代なのです。想像できますか？ 無意識のうちに意志の力が働いて、知らない間にやっていることってないですか、みなさんの人生の中で。そうしようと考えたわけですらないのに、なぜか知らないけれども自分の足が自分をそこに運んでいてこの人に出会ったという、そんな体験、みなさんにはありますか？

その時代は、グループ意識が生まれた時期でもあります。Who are we? われわれは誰なんだ？ つまり、我々は英語を喋る人間なのか、フランス語を喋る人間なのか、労働者なのか、為政者なのか…。我々はどのグループに属するのか、そういう意識。それは魂のレベルで起こることです。我々は「我々」なのだという意識。

ところが、ルネッサンスを経て初めてイギリス人は「アイ (I)」という意識を持つようになる——わたしは誰なのかということを問うようになる。Who am I? わたしは誰なんだ？ もちろん1500年代より以前、古英語の時期にも中英語の時期にも「I」という言葉は存在していました。しかし文化を見ると、詩を読むと、ルネッサンスの時期を経て初めて「個」というものが意識に浮かび上がるのです。古英語の時代は人々が動いた時代、中英語はグループ意識の時代、そして現代英語の時代になって個の目覚めが見られます。そのことは、特に詩の中に見ることができます。

古英語の期間の詩は、頭韻がとりわけ強いものです。頭韻とは、単語の一番頭にくる音が揃っているということです。「Be boys. Break bones.」だとか、「Fire flames furiously.」だとかいったものです。この時期の詩はそういうふうに、ガツガツと語頭に同じ音が続くスタイルが特徴です。中英語の時代になると、それとは異なった雰囲気が支配的になります。リズムと韻が主になってくる。チョーサーという詩人を知っていますか？ 私がそのチョーサーの詩を言いますから、ちょっと聴いていてください。

……

みなさんリズムを感じますか？ そして韻を踏んでいるのがわかりますか。

そして現代の英語では、頭韻もリズムも押韻もありますが、ここへ来て初めて詩にとって「意味」が重要であるという時期が始まります。シェイクスピア、そしてその時期の他の詩人

私たちは形よりも意味を大切とするようになります。シェイクスピアは1564年に生まれて1616年に死んだ人です。シェイクスピアではリズムも韻も強い。しかし、意味はもっと強くなる。もしシェイクスピアをリズムと韻だけに注目して読んだなら、子どもっぽい退屈なものとなるでしょう。しかしそこに意味を読もうとすると、シェイクスピアは生き生きとしてくる。何が言いたいかという、人々が動く時代の古英語、グループとしての意志が生まれた時代の中英語、そして、個(individuality)の時代の現代英語だと言いました。それは別の言い方でいうと、身体(Body)、魂(Soul)、そしてSpiritという順で発展していったことが見てとれるということなのです。スピリットという言葉日本語に訳すとどんな言葉になるのでしょうか？ 英語でも「Soul」と「Spirit」を区別して理解している人は少ないものです。多くの人にとってこの二つは同じ言葉です。でも私にとってはすごく違う意味を持っています。私にとってのSoulとは、私の中であって無意識が意識に変わり始める場所。そして私のSpiritの部分では、私は痛いほどに目覚めています。Spiritの中には眠りも夢見るものもありません。

### 《音楽性を失い「本質化」したことで、人を裸にするようになった英語言語》

現代の英語には語形変化＝インフレクションがほとんどありません。フランス語、スペイン語、イタリア語、それらの言語は、インフレクションの豊富さゆえに美しいものです。しかし英語は、そういった美しさ、音楽性のようなものを棄てました。裸になったのです。英語言語には、もはやフランス語、スペイン語、イタリア語のような言語そのものの持つ美しさというものがありません。フランス語では今日の買い物の買い物リストを書くだけで、それ自身がすでに詩のようです。何を言っても美しい、そういう音楽的クオリティがフランス語の中には残っているんです。しかし英語はそういう飾り付けのようなものをすべて失いました。その結果、人が英語を喋るとき、避けることができないまでに「どんな人が喋っているのか」が伝わります。イタリア語を喋るときには、言いたいこと、おもしろいことが何もなかったとしても、喋っているだけでまさに音楽です。スペイン語を聞いていると、スペイン語はその音が本当に美しい。喋っているだけで美しい、たとえば本当にその人が言っていることがどんなにくだらないこと

でも…。(笑)

英語ではそれができません。英語は、もし何も言うことがなかったら、ただ喋るだけのために喋っているとしたら、それは一瞬で伝わります。喋る人は意味のない人になってしまう。ある意味では、それは喪失であり、荒廃であり、貧困化であります。英語という言語は、そのように多くを失いました。反面、よいこともあったんです。英語を喋る人というのは、その人の姿が現れる。英語という言語が、その人に仮面を与えるということはありません。今日は、そのことをみなさんにお話ししたかったのです。私がみなさんに楽しんでもらいたいと思った肝心の話というのは、まさにこのことだったんです。

英語という言語が骸骨のようになっていったがために、それを喋る人は表れて目に見えるわけです。英語という言語の美しい点をあげるならば、英語で何かが言われようとするとき、そこで言われようとしていることには聴くだけの意味がある、という点なのです。もう一度言います。私はイタリア語が大好きです。ですからイタリア語を批判しようというわけではありません。イタリア人同士が話しているのを聞いていると、二人で喋っているのではなく、イタリア語が喋っているようにすら見えます。イタリア語が「見てください、私はこんなに美しい言語なんですよ、私は素晴らしいですよ」と。そこでは、イタリア語自身が主役になっている。英語の場合は、英語自身が主役なのではなく、そこで語られることが最も重要なのです。みなさんご存じかもしれませんが、言うべきことがない人たちが英語で話していると、何ともみっともないものです。英語を話しながら、何も重要な話がないのにただ格好良く見せたいために難しい表現を使って長たらしく話したりすると、直ちにみっともないことになっています。スペイン語のようなフォーマルかインフォーマルかの違いはほとんど消え去っていて、政府へ宛てた書類を書いているようが近所の人たち宛の手紙を書いているようが、英語のスタイルは基本的に同じです。

### 《人間を支配するのではなく、「仕える」ようになった無私の言語》

それでは、今日のお話の最初のテーマに戻しましょう。英語という言語が世界言語になっていった理由として、言語そのものの中に何か理由・要素があったのだろうかということから話を始めました。世界の歴史を見たときに、大英帝国そしてアメリカという勢力が世界的な力を誇り、それが英語言

語を世界に広めたという、一目瞭然の簡単で単純な理由のほかに、もしも私の仮説が正しいのならば、英語という言語そのものの持つ無心さ＝無私、私欲のない傾向というものが世界の人々にとって便利だったのではないのでしょうか。現在、英語が話される国は世界中にたくさんあります。北米、シンガポール、ニュージーランド、オーストラリア、インド等々。今日、英語はイギリス一国だけのために存在しているものではありません。英語は、イギリスから送りつけられた親善大使などといった側面がまったくなく、その国、地域にすっかりとけ込んでいる。何が言いたいかというと、英語という言語には、その言語そのものの中に、それをを使う人に「仕える」という傾向がある。それをを使う人たちを支配するのではなく、個人や文化に「仕える」という傾向があるということです。

最後に簡潔にお話しして終わりにします。英語は、現代英語へといたる道筋の中で、「個」というもののために役立つ言語となるために、これまで述べてきたプロセスをすべて通ってきました。そしてその中で、英語言語の「Spirit」の中に「無私 (Selflessness)」が生まれるにいたった。それはイギリス人のためだけに起きたことではない、そんなことが起きたからといってイギリス人にとっては何の利益にもなりません。にもかかわらず、今日の世界で生きる英語言語はそのような性格を持つようになった。たいへん重要なことだと思うのは、今日世界中のどの言語でも、誰かが自分のことをはっきりと表現しようと思ったときには「無私」の精神がその言語に宿ることです。そのような時代が世界に訪れた背景には、英語という言語の存在があるのではないのでしょうか。英語という言語で起きたそのような変化は、確かにブリテン島というところで始まったことであるかもしれませんが、しかし、そこから始まったことが、その土地でゆりかごのようにして育てられた傾向が、今日は世界中の言語に影響を与えています。どんな言語においても、それを話す人が自分のことを明確に伝えようと思ったときには、言語自身が「無私」となる必要がある、そういう現象が起きつつあると思うのです。ある地域で起こったことが、あっという間に世界中に広がることがあります。今日のお話の中で、本質的に人間＝人類のクオリティーの問題として潜むものについて、みなさんにお伝えすることができたらうれしいと思います。

時間をオーバーしてしまってすみませんでした。もう時間がきてしまったのですが、もし残りたい方がいらっしゃれば、

私も残ってもう少しお話ができたらと思っています。みなさんがいい勉強をできますように祈っています。ありがとうございました。(拍手)